

2025年度農村計画委員会秋季学術研究会

フィールドリサーチ展

読み解く 地場展

- 建築の前後左右 -

作品リスト

2025年9月13日(土)

11:00~16:00

会場

福岡市赤煉瓦文化館(旧日本生命保険九州支店)2階会議室

〒810-0001 福岡市中央区天神 1-15-30

コメンテーター

[総括] 魚谷 繁礼 (建築家・魚谷繁礼建築研究所)

[ゲスト] 渡邊 義孝 (建築家・尾道市立大学)

[ゲスト] 北 雄介 (長岡造形大学)

地場の造形小委員会 (日本建築学会 農村計画委員会)

プログラム

11:00- | フィールドリサーチ展 自由鑑賞

13:00- | 挨拶・主旨説明 : 大沼正寛 (地場の造形小委員会主査/東北工業大学)

13:10- | ミニレクチャー : ①魚谷繁礼 (前掲) ②渡邊義孝 (前掲) ③北雄介 (前掲)

14:50- | 討論・講演 : 進行 | 渡辺菊真 (高知工科大学)

登壇 | コメンテーター + 小委員会委員

阿部正 (ノーマルデザインアソシエーツ), 大沼正寛 (前掲),

江端木理 (京都女子大学), 梶浦暁 (梶浦暁建築設計事務所),

下田元毅 (大手前大学), 菅原香織 (秋田公立美術大学),

津村泰範 (長岡造形大学), 戸田都生男 (ものづくり大学) ほか

15:40- | 総評・レビュー : コメンテーターおよび小委員会より総評

15:50- | 閉会 (まとめ) : 下田元毅 (地場の造形小委員会幹事/大手前大学)

【主催】日本建築学会 農村計画委員会 【企画】地場の造形小委員会

【作品リスト】

【作品 No.1】折り重なるレイヤー「改修の痕跡と調査の描写」

フィジカルなインスペクションから得たアナログ（手測り）とデジタル（レーザー・3D スキャン等）の手法
築約 200 年の古民家軸組みとその調査図

ものづくり大学 | 島田 崇弘 (M2) 戸田 都生男

【作品 No.2】建築の形態形成 Evo-devo-Architects

発生的バイオミメティクスを応用した新たな設計手法

ものづくり大学 | 桐淵 玲央 (M2)

【作品 No.3】ポルトガル建測考

実測ノートから考察する表現としてのディテール

スタジオ・ニーネ | STUDIO NINÉ 田中 伸明

【作品 No.4】歴史的資源の顕在化

―地籍図と土地台帳から地域を読み解く―

神戸大学 | 山口秀文 陳鍼 荒木羅史 石川瑞己 仁部匠

【作品 No.5】紀州備長炭の技術伝承に関する現地調査

‐紀州備長炭振興館リニューアルプロジェクトを通じて‐

関西大学 | 吉羽辰之佑 (M2) 桑木 奏 (M2) 田中結花 (M2) 松谷周哉 (M2) 宮地茉莉

【作品 No.6】令和 6 年能登半島地震被災集落の姿

神戸大学 | 井ヶ谷 光優 (M1)

【作品 No.7】今と昔の治水の重なりが生み出した暮らし

高知市大津乙田辺島の治水を起点とした住まい方

高知工科大学 | 石橋一星 (M1)

【作品 No.8】アジアの各都市の 3 次元スキャンにおける現況調査

‐紀州備長炭振興館リニューアルプロジェクトを通じて‐

京都工芸繊維大学 | 谷口愛理 菊野慧美 灰野泰示

【作品 No.9】地域資源と地の始点

大手前大学 | 木本寧音 (B2)

【作品 No.10】岩手県気仙川流域圏の天然スレート建築形態変化

東北工業大学 | 佐田紘琢 (M1)

【作品 No.11】「マツの造形」

大手前大学 | 池野光美 (M2)

【作品 No.12】サトウキビ風景の脈

大手前大学 | 明 拓未 (M1)

【作品 No.13】バタンランゲージの実践

京都女子大学 | 村中沙弥香 (M1)

【作品 No.14】宿根木と筒石の集落における水の流れる空間構成

長岡造形大学 | 森園衛人 (B3)

【作品 No.15】空間と地場の持つ「可能性と未来像イメージ」の共有と可視化への試み

菊水酒造・福利厚生棟プロジェクトにおける先取り体験と
組織文化（ひとつ屋根の下）をアップデートするワークショップ

株式会社梶浦暁建築設計事務所 | 梶浦 暁

【作品 No.16】ハレの「瞬間」と前後左右

二次元的表現の試み

京都女子大学 | 江端 木環

【作品 No.17】日本寺社建築の空間構成術

‐吉備津神社の術‐

高知工科大学 | 渡辺 菊眞

【作品 No.18】漁村の慣性力

大手前大学 | 下田 元毅

【作品 No.19】南部北上帯の木組み民家と経年醸成価値

大東町 S 家実測調査 2004 + 金ヶ崎町 C 家再生 2009

東北工業大学 | 大沼 正寛

【作品 No.20】環境の断絶的変容と地場

地場考「感涙の風景『そうになったら、そういきる』」から

高知工科大学 | 渡辺 菊眞



【作品 No.1】

折り重なるレイヤー「改修の痕跡と調査の描写」

フィジカルなインスペクションから得たアナログ（手測り）とデジタル（レーザー・3D スキャン等）の手法

築約 200 年の古民家軸組みとその調査図

ものづくり大学 | 島田 崇弘 (M2) 戸田 都生男

埼玉県加須市の古民家のフィジカルなインスペクション（既存建物状況調査）において、アナログ（手描き・手測り）とデジタル（3D スキャン）を併用した。手測りの実測結果を手描きでスケッチしてその概要を CAD 化した図面に、さらに詳細な情報を手描きで重ねることで、デジタルとアナログ両者のレイヤーが「折り重なる」。図面が示す理想形と現場確認できた実際の形を同一面上で比較できるだけでなく、手測りにより梁の軸組の構造や仕口の納まり、痕跡等の感触を得ながら可視化して記録に残せる。埋木のない梁の仕口は、その形状や加工跡を図面で表すのは困難なため、3D スキャンにより、凹凸の細部等を含めた立体的で正確なデータを記録できる。以上より、小屋組み等の構工法の納まりを愛でながら、身体感覚や着眼点も資料として残せる。アナログの手描き・手測りの情報はセンシティブな構造差異を伝え、デジタル情報は立体的な正確さを担保する。古民家調査で得た職人の創意工夫がみられる技術技能等は、将来へ向けたアーカイブの宝庫を形成する。



【作品 No.2】

建築の形態形成 Evo-devo-Architects

発生的バイオミメティクスを応用した新たな設計手法

ものづくり大学 | 桐淵 玲央 (M2)

本研究は、生物の発生過程を建築設計のプロトコルへ応用し、敷地が内包する遺伝情報＝地・場を読み解くことで形態形成を行う、新たな設計手法である。従来の建築は、環境要素を考慮していても、最終的には設計者の恣意や経験則によって形態が収束する傾向が強かった。しかし本研究では、地形や光、風、植生、動線などの「地・場」を濃度勾配として数値化・可視化し、その濃度から空間を属性として発生・分節させる。さらに、その属性を備えた空間に対し、人間が後天的に用途を与えることで、建築が形態形成する手法を構築した。膨大な環境情報の処理をデジタルが担い、人間はそこから用途や居場所を選択する。すなわち、デジタルと人間の協働による新しい設計の方向性を提示するものである。生物の形態形成が共通のツールキットと遺伝子制御によって多様な形態を形成するように、建築もまた環境から遺伝した属性の集合体と人間の選択の重なりによって形態形成するのである。



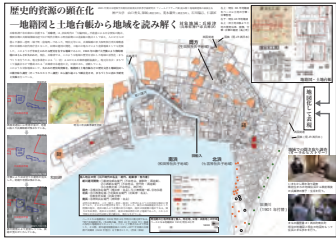
【作品 No.3】

ポルトガル建測考

実測ノートから考察する表現としてのディテール

スタジオ・ニーネ | STUDIO NINÉ 田中 伸明

〈寸法〉は、言わば、設計者の誰しもが使う「共通の文字／記号による共有情報」。完成した建物における〈寸法〉は、大概、合理性の現れ——設計された機能、構造、法規、精度、納まりなど——となりますが、建物個々の特性も表します。加えて、さながら言語や音楽のように、使用者と慣習による「癖や感性」の違いに、無限の幅をも、持ち合わせています。時に「精美や情趣」の抜きん出た建物に出会いますが、なぜそうした至妙な質にまで昇華し得ているのか、具体的には分からないものです。しかし、そう感じさせるすべては、その場で見えている形姿に存するのであり、〈寸法〉の集積が成立させるバランス感、といえるのは事実。——ならば、現物がもつライブな数字〈実測した寸法〉を追ってゆけば、その妙技を、分かり易い「共通の文字／記号による共有情報」を以て辿り、読み解くことができるのかも、ひいては体得できるのでは、……と期待し、ひたすら測って、ありのままを記録したのです。



【作品 No.4】

歴史的資源の顕在化

一地籍図と土地台帳から地域を読み解く

神戸大学 | 山口秀文 陳鍼 荒木羅史 石川瑞己 仁部匠

兵庫県神戸市兵庫区に位置する「兵庫津」は、奈良時代の「大輪田泊」、平清盛による日宗貿易の拠点、戦国末期の兵庫城築城を経て江戸時代中期から明治前期には北前船の拠点として栄え、人口2万人が暮らす都市一港町・城下町・宿場町一であった。明治元年には、兵庫城跡の旧大坂町奉行所兵庫勤番所が兵庫県の初代県庁舎となった。以降は運河の開発、工場の立地などにより産業地域としても発展した。このような千年以上にわたる歴史を有する地域であるが、1945 年の神戸大空襲により物的環境のほとんどが失われた。現在、兵庫津では、このような地域の歴史を活かした地域の活性化・まちづくりを行うため、地元事業者による「(一社)よみがえる兵庫津連絡協議会」、地元自治会・まちづくり協議会などで構成される「兵庫津日本遺産の会」が設立され、活動している。

このような対象地域において、失われた歴史的資源を、地籍図と土地台帳などの歴史文書と地域住民への聞き取り調査（オーラルヒストリー調査）から掘り起こして顕在化させ、まちづくりに活かす研究と実践を行っている。



【作品 No.5】

紀州備長炭の技術伝承に関する現地調査

- 紀州備長炭振興館リニューアルプロジェクトを通じて -

関西大学 | 吉羽辰之佑 (M2) 桑木 奏 (M2) 田中結花 (M2) 松谷周哉 (M2) 宮地茉莉

和歌山県日高郡みなべ町に位置する紀州備長炭振興館のリニューアルに際し、展示室の設計を行ったことがきっかけとなり、約 2 年半この地域に関わり続けてきた。また、展示内容を決める為に、この地域の特産品である紀州備長炭や製炭者がこれまで歩んできた歴史について知る必要があると考えた。そこで、紀州備長炭の発祥の地とされる和歌山県みなべ町及び田辺市を対象に、これまで記録されてこなかった紀州備長炭の製炭者の生活を明らかにすることを目的とし現地調査を行った。明治期のみなべ町及び田辺市の製炭者の分布に関しては、明治期の炭問屋が取引先が記載された炭仕入帳を収集し読み解くことで把握した。また、昭和期以降の紀州備長炭製炭者の暮らしの変遷や移動窯の所在に関しては、製炭者へのヒアリングや移動窯をめぐるトレッキング、窯の実測調査を行うことで明らかにした。本調査より、山づくりを行いながら炭を作ってきた製炭者の技術の継承や記録に貢献したい。



【作品 No.6】

令和 6 年能登半島地震被災集落の姿

神戸大学 | 井ヶ谷 光優 (M1)

対象集落・石川県珠洲市大谷町は令和 6 年能登半島地震、令和 6 年豪雨の最大の被災集落の一つである。地震では多くの住宅が倒壊し、豪雨では甚大な被害をもたらした土砂崩れが発生し、二つの災害は集落到破滅的な打撃を与えた。

この集落は、少子高齢化、過疎化が著しく進んでいる地域であるが、5 月には鯉のぼりフェスティバル、9 月にはキリコ祭りが催され、近年では奥能登芸術祭の中心展示場（スズ・シアター・ミュージアム、スズ・シアター・ミュージアム別館）が大谷の廃校、廃保育所に設置され、活気付いていた。

この集落図は、そのような集落の被災前、被災後を写真とともに集落図に落とし込んでいる。青々とした森、自然、綺麗な海の姿、黒色の瓦が連なる集落の様子を描いた。能登半島の多くの集落が大谷のように同様の被害を受けたが、現在もなお復興の道を歩んでいる道中である。被災前、被災後の姿をここでは描いたが、みなさんが復興後の姿を実際に見に行っていたただける契機になることを期待している。



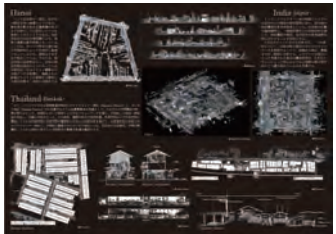
【作品 No.7】

今と昔の治水の重なりが生み出した暮らし

高知市大津乙田辺島の治水を起点とした住まい方

高知工科大学 | 石橋一星 (M1)

高知市は古くから水害の多い地域であり、その水害を防ぐ、あるいは緩和するために今日に至るまで、様々な治水事業が行われてきた。その中でも土佐藩が行った大規模な治水事業は、現在の高知の地割や治水に大きな影響を与えている。この治水の方針は、城下町を守るために上流部にあえて氾濫させる場所をつくるというものであり、大津はその氾濫を受け入れる土地であった。しかし、その一部である田辺島周辺の集落は比較的守られた土地であり、守り、この場で生きていきたいという意思が、治水構造物や神社、地藏尊等の集落の拠り所に現れている。また現在の河川沿いの大きな土手、かつての堤防に合わせた排水機場等の新たな治水施設とも重なることで、今の暮らしが更新されながらも、昔から変わらない集落の形を保っている集落となっている。これは、これからの未来でこそ大切にしていくなすべき地域の在り方の1つであると考え、フィールドワークを行うこととした。



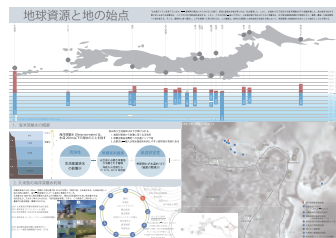
【作品 No.8】

アジアの各都市の3次元スキャンにおける現況調査

—紀州備長炭振興館リニューアルプロジェクトを通じて—

京都工芸繊維大学 | 谷口愛理 菊野慧美 灰野泰示

本研究では、アジア各都市において実施した3次元スキャンデータの取得とその分析を通じて、都市空間の現況把握を試みた。近年、3次元スキャン技術は都市空間の高精度な記録や可視化を可能とし、従来の平面的な調査手法では捉えきれなかった情報の取得を実現している。本調査では、都市ごとに取得した3次元データを基に空間構成や形態の特徴を分析し、その結果、従来の統計的・平面的手法では見えにくかった都市の実際的な構造や空間的秩序を明らかにすることができる。これらの成果は、都市研究や計画・設計分野において、空間情報をより多角的に活用するための基礎的知見となると考えられる。



【作品 No.9】

地域資源と地の始点

大手前大学 | 木本寧音 (B2)

「久米島でイチゴを育てています」——亜熱帯の陽光にさらされるこの島で、高温に脆弱な作物が育つのか。私は驚愕した。しかし、水温約10℃で安定する海洋深層水がその認識を覆した。

畑土壌を冷却する管に流し込まれる深層水は、イチゴのための微気候を創出する。しかし、これは利用の一端にすぎない。久米島北東で汲み上げられた深層水は、まず海洋温度差発電の冷熱源となり、農業・養殖・化粧品開発へと姿を変える。そして、最終的に海へ還流し、二千年循環へと再び溶け込む。

この連鎖は、自然の大循環と人為的技術が交錯する場において、地球循環と地域営為の交点としての造形として立ち現れる。

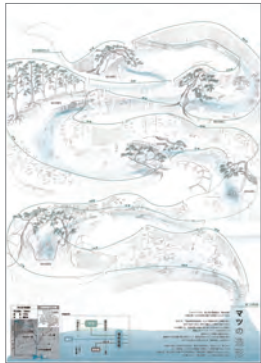


【作品 No.10】

岩手県気仙川流域圏の天然スレート建築形態変化

東北工業大学 | 佐田紘琢 (M1)

宮城には「スレート」（和名「石盤」）と呼ばれる建築石材の産地がある。天然の石なのに薄く割れ、曲げに強く、永い年月が経っても変質しないスレートは、明治以降に東京駅や三菱一号館美術館など洋風建築の屋根に用いられた。その後大正・昭和戦後にかけて、とくに宮城県北から岩手県南にかけて民家に広まり、民家建築群が、現在も特定の市町村に限らず広域に分布している。それらは建築史、住宅史、生活文化史などの視点から、一連の広域分布する文化遺産群とみなすことができる。本研究室では、現存する天然スレート建築を広域調査を行い今後の利活用へ資する知見を得ようとしている。縦断距離約 100km にも及ぶ調査範囲の中で、南三陸町へ限定し、着目した建築物の屋根形状や石材意匠の他に連関した、地理的条件や生業を書き込んだ調査マップから、その実状を捉え、普及時の生活景観を読み解きたい。

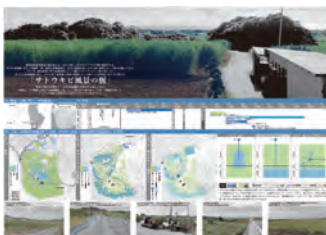


【作品 No.11】

「マツの造形」

大手前大学 | 池野光美 (M2)

このスケッチは、夙川河川敷緑地の“庭的空間”を読み解くための思考の断片を表現したものである。1932 年、「受益者負担金制度」により地域住民が工事費を担い、日本で初めて河川一帯を公園化した事例が夙川である。その背景には、花崗岩質の地盤に根を張り、氾濫を抑えると同時に景観を形づくった「マツ」の存在があった。西宮市はこの景観に価値を見出し、緑樹帯や水流を最大限に保存しつつ遊歩道を設ける二つの手法で整備を進め、1937 年の竣工と同時に河川は「風致地区」に指定された。`「利用と保存」が同居する夙川は、現在も地域住民に“庭のように”親しまれ、水・遊歩道・マツが 93 年間続く要素として空間を織りなしている。本展示は、夙川の持つ文脈の中で夙川固有の“庭的空間”を継承する方法を探りつつ、その豊かさを“一筆の空間”として描き出す試みである。

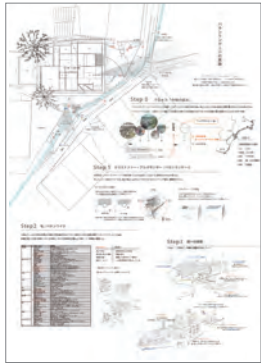


【作品 No.12】

サトウキビ風景の脈

大手前大学 | 明 拓未 (M1)

鹿児島県奄美諸島の徳之島には、山から海へと広がるサトウキビ畑の風景がある。中でも水資源に乏しい伊仙町・阿三集落、伊仙集落は、広大な農地を有しながら水の条件によって営みを築いてきた。1973 年、減反政策に伴う転換事業によって稲からサトウキビへと移り変わった。かつての水田畑地に転じ、それに伴う水資源と利用の整備によって畑ごとに水利用の在り方は異なる。風景の変化は故郷をめぐる世代的認識の差異を生み出してきた。本展は、この風景に内在する時間軸を「水」という視点から捉え直し、写真・変遷図を通して、サトウキビ風景の前後左右を浮かび上がらせる試みである。



【作品 No.13】

パターンランゲージの実践

京都女子大学 | 村中沙弥香 (M1)

本展示は、パターンランゲージと私自身が地域から読み取ったボタンを用い、今後の設計につなげるための実践的スタディである。

フィールドはボッチの家の「庭」。

ここに、クリストファー・アレグザンダーのボタンと自らのボタンを重ね合わせた提案を行った。

アレグザンダーの「パターンランゲージ」は、暮らしや空間に共通の言語を与え、人々が相互理解を通じて価値や記憶を共有しうる設計手法であり、場所論や環境心理学、集合的記憶とも接続する理論的素地をもつ。

この枠組みを踏まえ、庭には空間と地域のつながり、利用者が自由に使い方を選べる余地を重視し、「日の当たる場所」「木のある場所」「キャンパス屋根」といったボタンを落とし込んだ。そして、九鬼という建築的環境資源に内在する“cannot be named(無名の質)”を翻訳し、「見上げる花」「網のアーカイブ」といった特質を言語化し、空間の質として庭に浮かび上がらせる試みを行った。



【作品 No.14】

宿根木と筒石の集落における水の流れる空間構成

長岡造形大学 | 森園衛人 (B3)

どんな集落でも必ず水がどこかにあり、水が流れていくシステムがある。私はそれらのシステムを宿根木と筒石の二つの海に面する集落のフィールドリサーチによって視覚化することで、どのような水の空間が集落と関係しているのか考察する。宿根木と筒石は新潟県にある崖と海に挟まれた地形に位置し、密集した家屋が建ち並ぶ集落である。私はこの二つの集落には密集した家屋と同時に、密集した水の流れが人が通る道（街路）とは別の水の道（水路）として存在すると考えた。そこで二つの集落の水の流れを特に街路と水路というものに注目して建築や人との関係性を読み解いていく。



【作品 No.15】

空間と地場の持つ「可能性と未来像イメージ」の共有と可視化への試み

菊水酒造・福利厚生棟プロジェクトにおける先取り体験と
組織文化（ひとつ屋根の下）をアップデートするワークショップ

株式会社梶浦暁建築設計事務所 | 梶浦 暁

本作品は、菊水酒造の旧倉庫を福利厚生棟として再生する過程で行った「ヴィジョン・シェアリング・ワークショップ」の記録である。単なる建物更新にとどまらず、従業員が自らの未来像を語り、会社の中長期計画と重ね合わせることで、組織文化の浸透と更新を図った点に独自性がある。倉庫という閉鎖的空間にハンモックや植栽を設え、カレーの香りやゲーム感を取り入れることで、心理的ハードルを下げた環境を構築し、短時間でも本音を引き出す仕組みとした。本プロジェクトは「場」がもつ身体的・感覚的作用を媒介として、未来に対する個々の内発的動機を可視化し、組織全体の方向性と重ね合わせる実践である。すなわち本作は、地場を読み解くことを通じて「未来像をリサーチする」という新たなフィールドリサーチの試みを提示する。



【作品 No.16】

ハレの「瞬間」と前後左右

二次元的表現の試み

京都女子大学 | 江端 木環

鳥羽離島・答志集落（三重県鳥羽市）の「神祭（じんさい）」は、海の神様である八幡神社の神様に豊漁を願って弓引き神事を行う祭りである。

祭りは毎年1月中旬に3日間にわたって行われるが、中でも2日目の「弓引き神事」が最大の見せ場、すなわちハレの「瞬間」となる。お祭りが大きな墨付きの的を担いで坂を駆け上がると、男たちが飛び込み、墨紙を奪い合う。奪った墨紙はお守りとして用いられ、「マル八」の字を家や船に書き、大漁や家内安全を祈願する。

しかし、ハレの【瞬間】は、祭りの中の一場面にすぎない。

本展示は、3つの二次元的表現を通して、「ハレの【瞬間】」と、その前後や周囲で展開される多様な関係性を捉えることで、祭りにおける「時間」と「空間」、そしてそれらをつなぐ人々の営み・祈りを可視化する試みである。



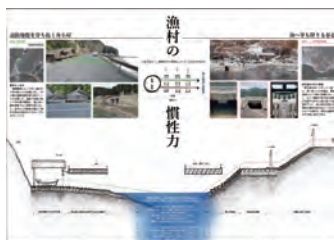
【作品 No.17】

日本寺社建築の空間構成術

- 吉備津神社の術 -

高知工科大学 | 渡辺 菊真

「日本寺社建築の空間構成術」では、寺社建築を対象に、その空間体験で感受したこと（＝空間現象）を原点に据える。そして、そのような現象を引き起こした要因を空間構成の術に求める。ここでいう空間構成とは①自然地形の中に寺社建築単位をいかに配置するか（配置術）、②配置した建築単位にいかなる形態を与えいかなる向きを与えるか（方位と正面性）、③配置術にとって要となる建築にどのような内部分節を施すか（内部分節）、の3つの複合である。日本建築は木造による架構技術とその美、軒下や縁などの内外媒介性、空間の陰影、そういったことで語られることが多い。その一方で空間構成から読解されることは稀である。しかし、寺社、特に神社空間は社殿の架構や形態などよりは、自然地形のなかに社殿をいかに配置するかが、信仰空間形成の要をなし、その比重は大きい。「空間体験の感受」という情緒を情緒的に読み解く不毛を排し、信仰空間を構築する基幹の方法に迫ること。ここではそれを強固に意識している。



【作品 No.18】

漁村の慣性力

大手前大学 | 下田 元毅

地場の造形は、長い時間をかけて積み重ねられた生業や信仰の「慣性力」が形となって現れる。

その慣性力を象徴する二つの事例を紹介したい。

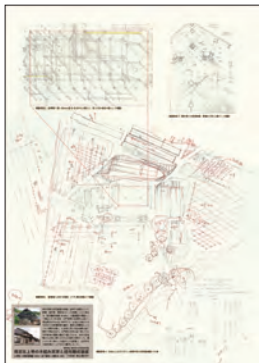
ひとつは舟屋と海の間に道路が敷設された際、舟が海に出るために道路下を掘り抜いたトンネル。

もうひとつは海に続く神社の参道が護岸埋立によって断たれ用途した時、海へ降りる参道を守るために護岸の一部を穿ち抜いてつくられた石段。

いずれも近代の力に押し流されることなく、地域が固有に持つ生業の形式や信仰の軸線を保ち続けるために生み出された応答である。

そこには、地場が積み重ねてきた自らの原理で空間を残し続ける意思の強さが宿っている。

こうした造形を通じて見えてくるのは、地域の時間が紡ぎ出す文脈の力であり、風土に刻まれた「地場の慣性力」そのものである。



【作品 No.19】

南部北上帯の木組み民家と経年醸成価値

大東町 S 家実測調査 2004+金ケ崎町 C 家再生 2009

東北工業大学 | 大沼 正寛

新旧多様な住宅資産を評価・活用する概念として、愛着・経年美・歴史性といった時間とともに深まる「経年醸成価値 -WoMa-」の基礎論を博論として提出した 10 日後、江戸後期の古民家に出会う。

現地再生が叶わない条件下で、土地との結びつきを刻むため配置図等を書き、軸材は架構図にしたうえで解体分類し、5 年後に同じ旧仙台領の金ケ崎町で再生させた。江戸期の古材は全て移したが、旧所有者が愛着の観点で選んだのは、台所の柱省略のため後に挿入された大正期の材料だった。個人の人生に照らした経年による愛着と、近世古材の経年美がシェアされた事例となった。

表層への露出は限られるものの、土地から生えたような木組みの、地場にもとづいた特色と、刻まれた木材そのものが工芸品集合体として織りなす特色。そして、それらが経年のなかでバージョンアップしてきた複合体である、多世代的な特色。そういった総体を理解しようとした一つの足跡だ。



【作品 No.20】

環境の断絶的変容と地場

地場考「感涙の風景『そうになったら、そういきる』」から

高知工科大学 | 渡辺 菊真

「環境とそれに応じた生業、その状況に応じた住まいや造形」こうしたセットを地場とみる。このセットの根幹が断絶かと思いき激しきで変容することがある。例えばいきなりダム湖が出現、だから、いきなり漁村になるとか。当然、この断絶に対して、突然変異に見える住まいや造形が出現する。「新しい地場」かと、思う。ただし、環境の激変に関わらず、周辺で入手できる材は変わらないものも多い。この時、突然変異かのような住居なども、それまで使用していた材によっていたりもする。しかし、これまでにない工法を導入したりもして。断絶的環境変容の中で人はいかにそこで造形するのか。ここに地場の造形の本質の一つが見えるのではないか。これはそのためのメモである。

出展作品募集

2025年8月31日(日) 23:59まで *詳細は裏面

2025年度農村計画委員会秋季学術研究会

フィールドリサーチ展

読み解く

地場展

- 建築の前後左右 -

本展覧会は、建築の前提となる「地」や「場」を読み解くフィールドリサーチそのものを、建築的な批評・創造の行為として位置付ける試みである。多様な現場における観察・記述・分析を通じて、フィールドに潜む関係性や価値を可視化し、建築前の思考やまなざしが交錯する場としたい。

2025年9月13日(土)
11:00~16:00

会場

福岡市赤煉瓦文化館(旧日本生命保険九州支店)2階会議室
〒810-0001 福岡市中央区天神 1-15-30

コメンテーター

[総括] 魚谷 繁礼(建築家・魚谷繁礼建築研究所)

[ゲスト] 渡邊 義孝(建築家・尾道市立大学)

[ゲスト] 北 雄介(長岡造形大学)

地場の造形小委員会(日本建築学会 農村計画委員会)

プログラム

11:00- | フィールドリサーチ展 自由鑑賞

13:00- | 挨拶・主旨説明 : 大沼正寛(地場の造形小委員会主査/東北工業大学)

13:10- | ミニレクチャー : ①魚谷繁礼(前掲) ②渡邊義孝(前掲) ③北雄介(前掲)

14:50- | 討論・講評 : 進行| 渡辺菊真(高知工科大学)

登壇| コメンテーター+小委員会委員

阿部正(ノーマルデザインアソシエイツ), 大沼正寛(前掲),
江端木環(京都女子大学), 梶浦暁(梶浦暁建築設計事務所),
下田元毅(大手前大学), 菅原香織(秋田公立美術大学),
津村泰範(長岡造形大学), 戸田都生男(ものづくり大学)ほか

15:40- | 総評・レビュー : コメンテーターおよび小委員会より総評

15:50- | 閉会(まとめ) : 下田元毅(地場の造形小委員会幹事/大手前大学)

【主催】日本建築学会 農村計画委員会 【企画】地場の造形小委員会

フィールドリサーチ展

読み解く 地場展

- 建築の前後左右 -

情報・気候・災害・経済などの変化が著しい現代社会において、ハードウェアをかたちづくる建築的営為は、かつてなく不安定な状況に置かれている。こうした時代において、建築的造形が依拠する「地」「場」の普遍的基盤をいかに捉え直すかが、根源的な問いとして浮かび上がる。「フィールドリサーチ展」では、地場の読解への関心を深め、今日的なフィールドに対する批評性や背景への眼差し、場所に潜在する価値への感受性と創造的な解釈を広げたい。着目する「地」や「場」の前後の状況、地形・素材・植生、関わる人々の理想・営み・感性・技術といった「建築の前後左右」をいかに読み解くか。そしてそれを他者と共有できるビジュアルツールとして結実させられるか。リサーチ力・実測術・表現力を通じて、個別具体でありながら通底する課題と可能性を共有することを目指したい。

【参加方法と参加費について】

1. 秋季学術研究会 参加者

下記の申込フォーム（リンクまたはQRコード）より、必要事項をご記入の上、お申し込みをお願いいたします。参加費（資料代を含む）については以下の区分をご確認のうえ、クレジット決済にてお支払いください。

申込締切：2025年9月4日（木）

【<https://www.aij.or.jp/event/detail.html?productId=704926>】

区 分	参 加 費
・ 会 員	1,500円（不課税）
・ 会員外	2,200円（税込）
・ 学 生（会員）	1,000円（不課税）
・ 学 生（会員外）	1,100円（税込）

研究会 参加の方



2. 作品出展者

本会個人会員（準会員を含む）または会員のみで構成するグループを対象とし原則として9月13日（展覧会・秋季学術研究会の当日）に会場での設営・参加が可能な方に限ります。また、左記の参加登録費の納入が必要です。下記の募集要項をご確認の上、Googleフォーム（リンクまたはQRコード）より必要事項の記入と提出作品（PDF）のアップロードを行ってください。

【<https://forms.gle/MxPAzeeuTsM8aYAQ8>】

* Googleアカウントへのログインが必要です。

作品出展者の方



ご提出いただいたデータは、作品確認および運営のために使用いたします。また、今後図録等の制作に活用させていただく場合がありますので、あらかじめご了承ください。

出展作品募集

応募締切 2025年8月31日（日）23:59 まで

【展示作品の概要】

本作品展では、フィールドリサーチ（現地調査）の成果や調査中のメモ・スケッチなど幅広い記録物を対象とします。対象地域・対象物に関する調査記録、分析図、論文や設計に関連する調査資料、自主プロジェクトやワークショップの成果など、調査手法やアウトプット形式は問いません。

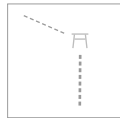
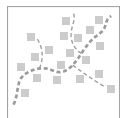
※過去の活動記録も応募可能です

-応募例-

- ・ 設計課題や卒業設計に伴う敷地調査記録（野帖、分析図等）
- ・ 卒業論文・修士論文・査読付論文等に基づく調査記録や図表
- ・ 実施設計や提案書作成に伴う調査資料（スケッチ、分析図等）
- ・ 調査等に基づく視覚資料（図面、模型写真、ドローン撮影等）
- ・ プロジェクトやワークショップ等で行った成果物

-注意事項-

応募作品は応募者自身が制作・記録したオリジナルのものに限ります／過去に行った調査や制作物も応募可能ですが、著作権や公開範囲に問題がないことを確認のうえご応募ください。



【展示・作品の取扱いについて】

作品は、応募者ご自身でパネル化のうえ、当日会場まで持参いただきます。展示の時間帯や搬入・設営に関する詳細は、後日メールにてご案内いたします。

（*1）提出物のドキュメント構成（推奨）

本作品展では、都市・農村・山村・漁村など、あらゆる場所やスケールを対象とした「読む／問い直す」という批評的な捉え方や読み解きを展示するため、下記の事項を展示作品に記入して下さい。

① タイトル・サブタイトル

- 批評の軸となる問いや視点を明示するタイトルを付けること
例：「分岐する水路網」「仮設の風景と制度」など

② コンセプトテキスト

- 調査の目的を明記すること、なぜそのフィールドに着目したのか
- どのような現象・関係性を観察し、どんな解釈を導いたか、神事の空間
- 空間に対する問い、読み取りの方法、批評的意図の要約

③ フィールドの概要

- 対象とした場所の位置・背景を示すこと
例：都市の一角、山間の集落、漁港周辺、里山、造成地、ニュータウンなど
地図、現地写真、断面スケッチ等を用いて対象を把握できるようにすること

④ 批評的観察・空間の解釈表現（視覚＋テキスト）

- 図・ドローイング・コラージュ・手描き・メモなど自由な表現で示すこと
例：人の流れや滞留、農作業・漁の時間帯、制度と空間のズレなど
地形や土地利用、境界・緩衝帯としての空間など
集落・都市における生活の痕跡、過去と現在の共存状態など
建築未満／建築以外の構造物の記録と読み取りなど

【お問い合わせ】 日本建築学会 農村計画委員会 地場の造形小委員会

E-mail：ebashim@kyoto-wu.ac.jp（京都女子大学 江端）

* 本ポスター図版提供：渡邊氏、北氏、および小委員会メンバー

